

かわむきひがしがつ

川向東貝津遺跡

所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度6分26秒 東経137度33分54秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成27年5月～平成27年11月

調査面積 2,740㎡

担当者 樋上 昇・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

立地と環境 川向東貝津遺跡は豊川の支流、境川右岸の河岸段丘上に立地する。遺構検出面での標高は374～376mを測り、東から西に向かって緩やかに傾斜している。近世以降には、石垣で区切られた5段の平坦面からなる棚田に改変されており、さらに1950年代には水田が放棄されて杉の植林がおこなわれている。

調査の概要 この遺跡は平成22年度に今回の調査区の北側で発掘調査が実施されており、縄文時代後期の埋甕や集石土坑などを確認している。

今年度は、5段からなる平場の西側3段分を15A区、東側の2段分を15B区として発掘調査を実施した。その結果、15A区では、上面遺構として縄文時代中期の竪穴建物跡と集石土坑、縄文時代後期の竪穴建物跡と埋甕、所属時期不明の陥し穴などを確認した。また、下面遺構として、後期旧石器時代と縄文時代草創期の石器集中区を検出している。

いっぽう15B区では、丘陵上部からの度重なる土石流による地形の著しい改変により、土坑数基のほかにはめだった遺構の確認はできなかった。

上面遺構 縄文時代中期の遺構群は、おおむね15A区西辺に集中している。竪穴建物跡は4棟(001・002・003・114SI)検出した。

001SIは一辺約3mの隅丸方形を呈し、中央に石囲炉を有する焼失住居で、炭化材が良好に遺存していた。

002SIは一辺約4mを測る隅丸方形で、中央の石囲炉がきわめて良好な状況で検出された。また、床面に配置された平石のうちのひとつの下部からは、ほぼ完形の埋甕が出土した。

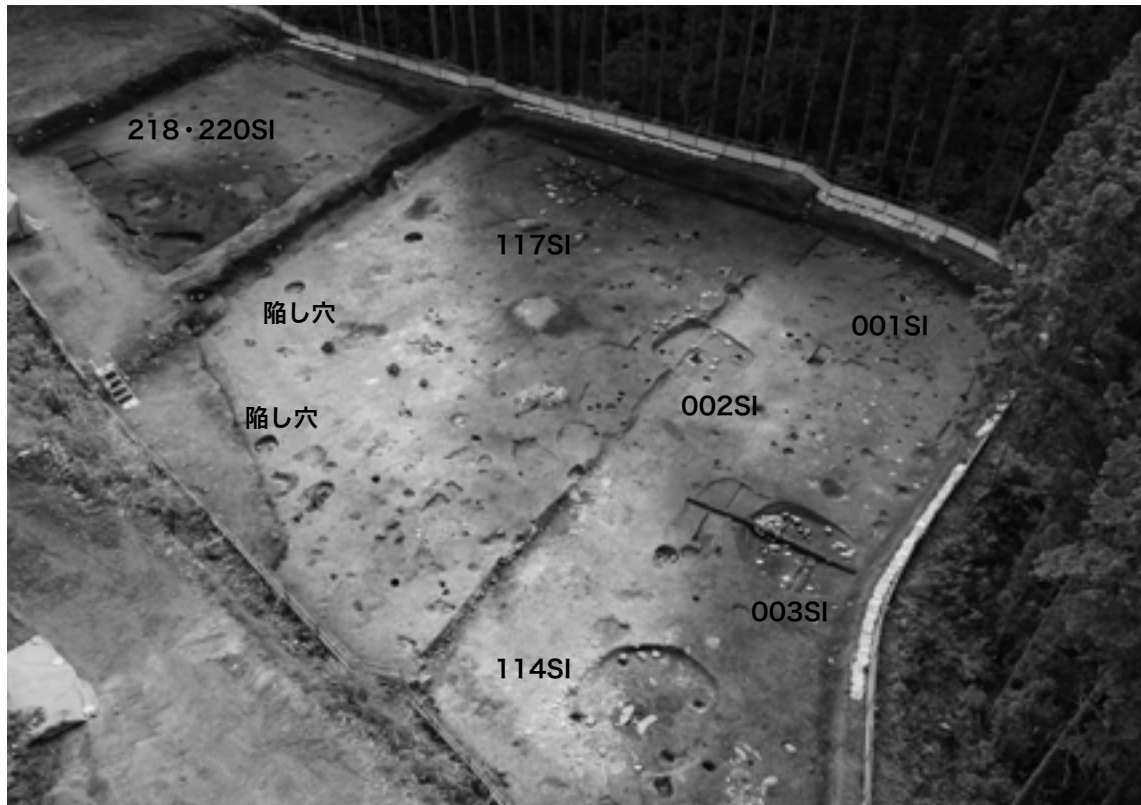
003SIは長軸約5mのやや五角形に近い平面プランをもち、中央の石囲炉も五角形を呈する。この竪穴建物跡には、住居廃絶後に大量の人頭大の石が投げ込まれていた。

114SIは直径約5mを測る円形プラン。かつての境川の旧河床にあたる円礫層を掘削して築かれていた。中央の石囲炉は幾度かの補修がなされている。

集石土坑には焼け石をとまなうものが多く、屋外炉として利用された可能性が高い。

縄文時代後期の遺構群は西から2段目と3段目の平場に展開する。竪穴建物跡は177・218・220SIの3棟だが、いずれも遺存状況は不良で、炉跡も判然としない。また、縄文時代中期の竪穴建物跡である002SIの埋土上層からも縄文時代後期の埋甕が確認されていることから、すでに後世の造成によって削平された竪穴建物跡が数棟存在していたと考えられる。

そのほか、所属時期不明の陥し穴は西から2段目の平場で2基検出している。(樋上 昇)



15A区全景 (北西より)



001SI全景 (西より)



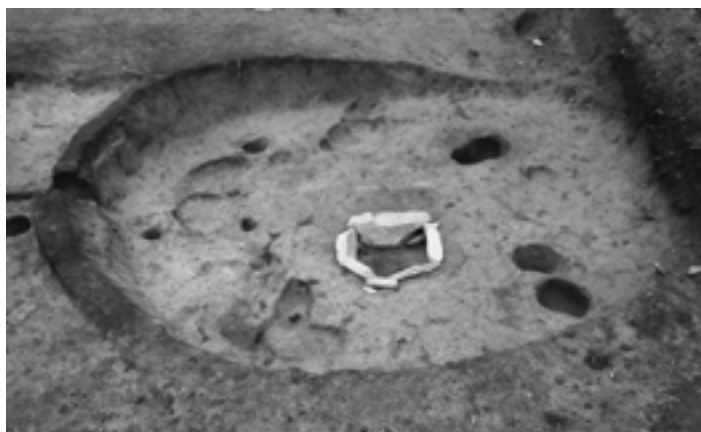
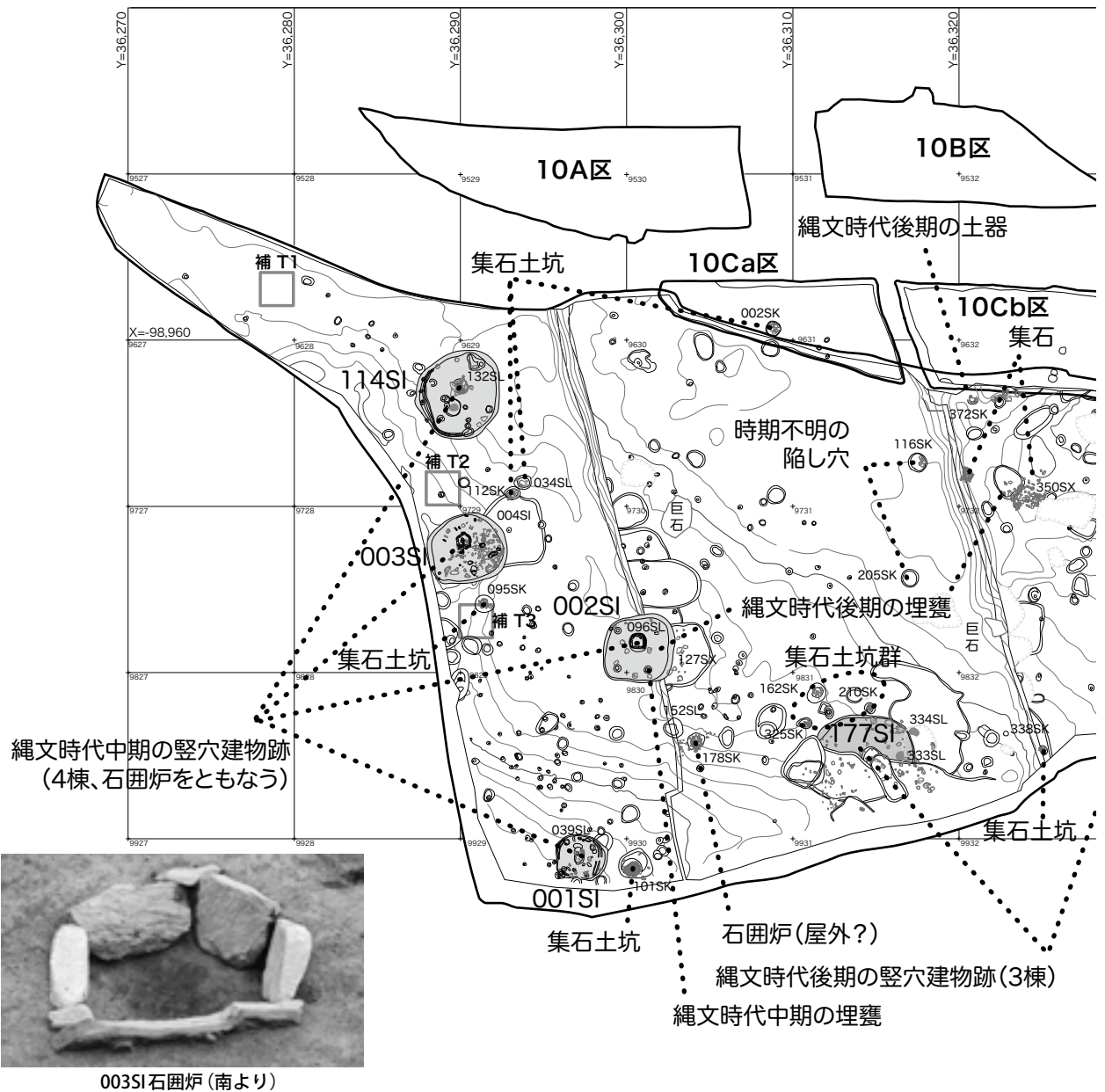
002SI全景 (西より)



002SI埋甕 (西より)



002SI石囲炉 (西より)



003SI全景(北より)



縄文後期埋甕(東より)

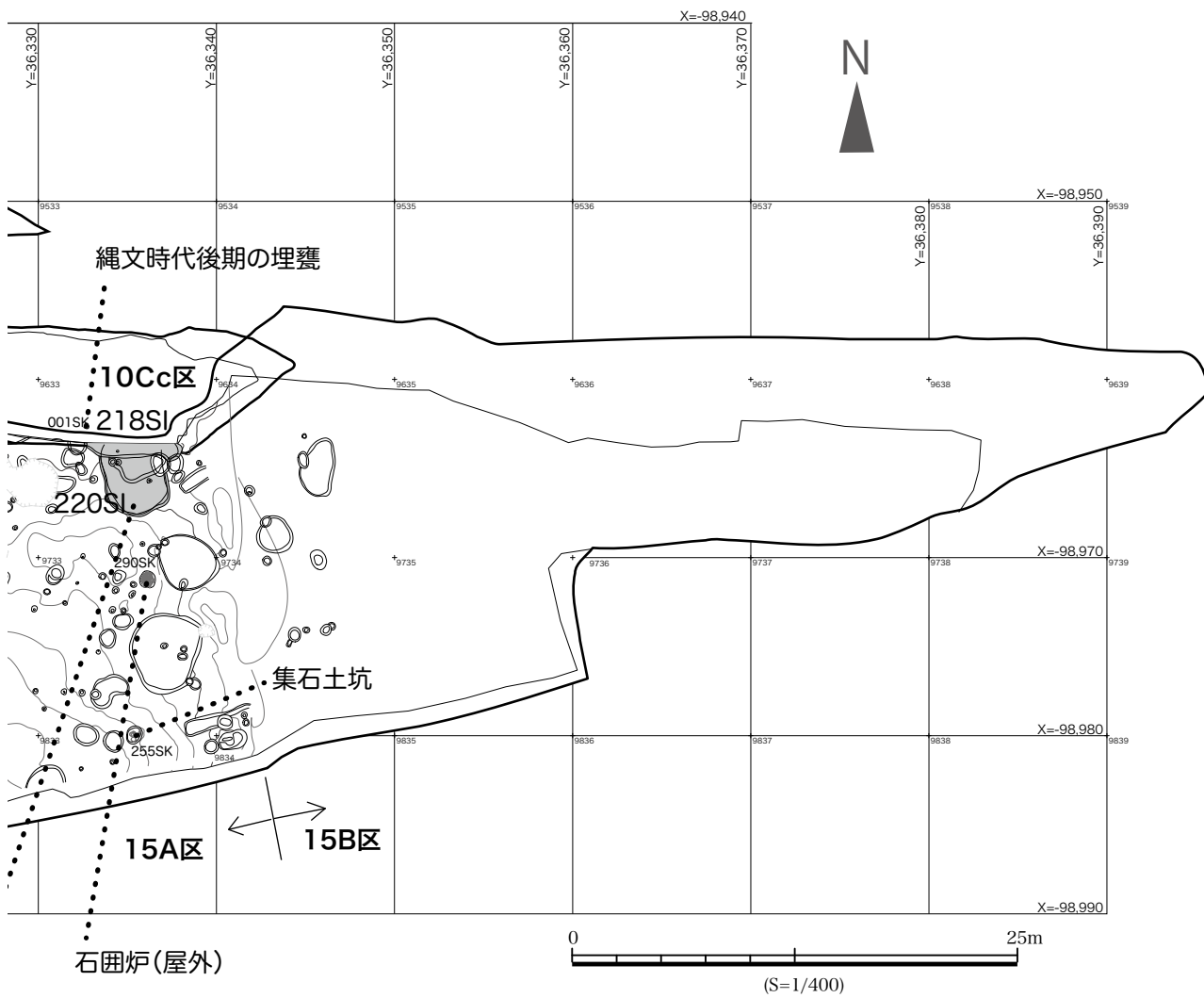
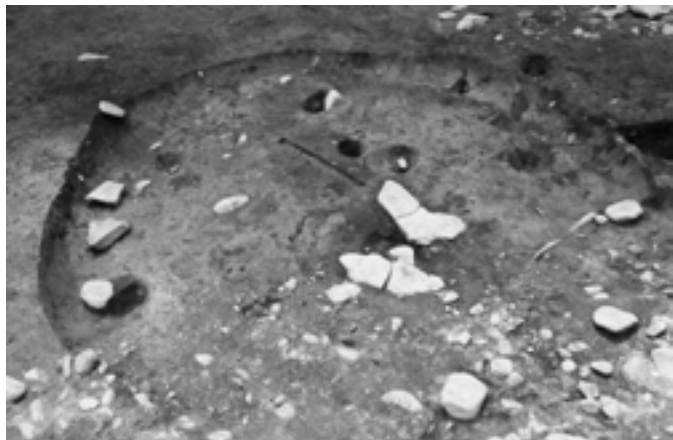


図1 上面遺構全体図 (1:400)



1145石囲炉(北より)



1145SI全景(東より)

下面遺構 下面補足調査は、川向東貝津遺跡の本調査中に、縄文時代中期の遺構検出面となっている黄褐色シルト層中より石器が多数検出されている状況を踏まえて、下層の縄文時代中期以前にさかのぼる遺構・遺物の存在を明らかにするために行われたものである。

結果として多数の安山岩系の石器・石材、白色風化石材の石器・石材を確認した。遺構は確認できていない。調査範囲は、2m×2mのトレンチを3カ所、計6㎡。検出面以下での石器の出土は、当初15A区に限られていたため、15A区内での本調査時に遺物の出土が特に多く見られた箇所に設定した。

補TT1では検出面直下で多数の石器・石材を検出し、そのほとんどが安山岩系石材である。補TT1の周囲には旧河床の礫層が多数露出し、補TT1出土の石器・石材群はこの河川堆積直上に位置している。

補TT2は他の2カ所に比べると石器の出土数は少量であったが、さらに掘削した結果、下位にいたっても白色風化石材の石器が出土した。

補TT3では検出面から上層は黒曜石が検出され、中位～下位にいたると黒曜石が姿を消し、白色風化石材と安山岩系石材が占める状況も判明した。このことから、石器の分布は上位と下位では異なった様相を示すものと思われる。

愛知学院大学の白石浩之教授から複数の文化層が存在する可能性が指摘された。さらに補TT1での河川堆積直上での石器・石材出土については、旧河床礫層への混入した形での検出も予見されていた。

以上の補足調査の結果と、この後に行われた範囲確認調査の結果を併せると、石器の分布は層位や位置で偏在する傾向はあるものの、広範囲にわたることを窺わせる。そのため、石器・石材の分布は、15A区の西半部に広く分布していると考えられる。(鈴木 恵介)



補TT1(南西より)



補TT1石器・石材集中部(南西より)



補TT2(北西より)



補TT3(北西より)

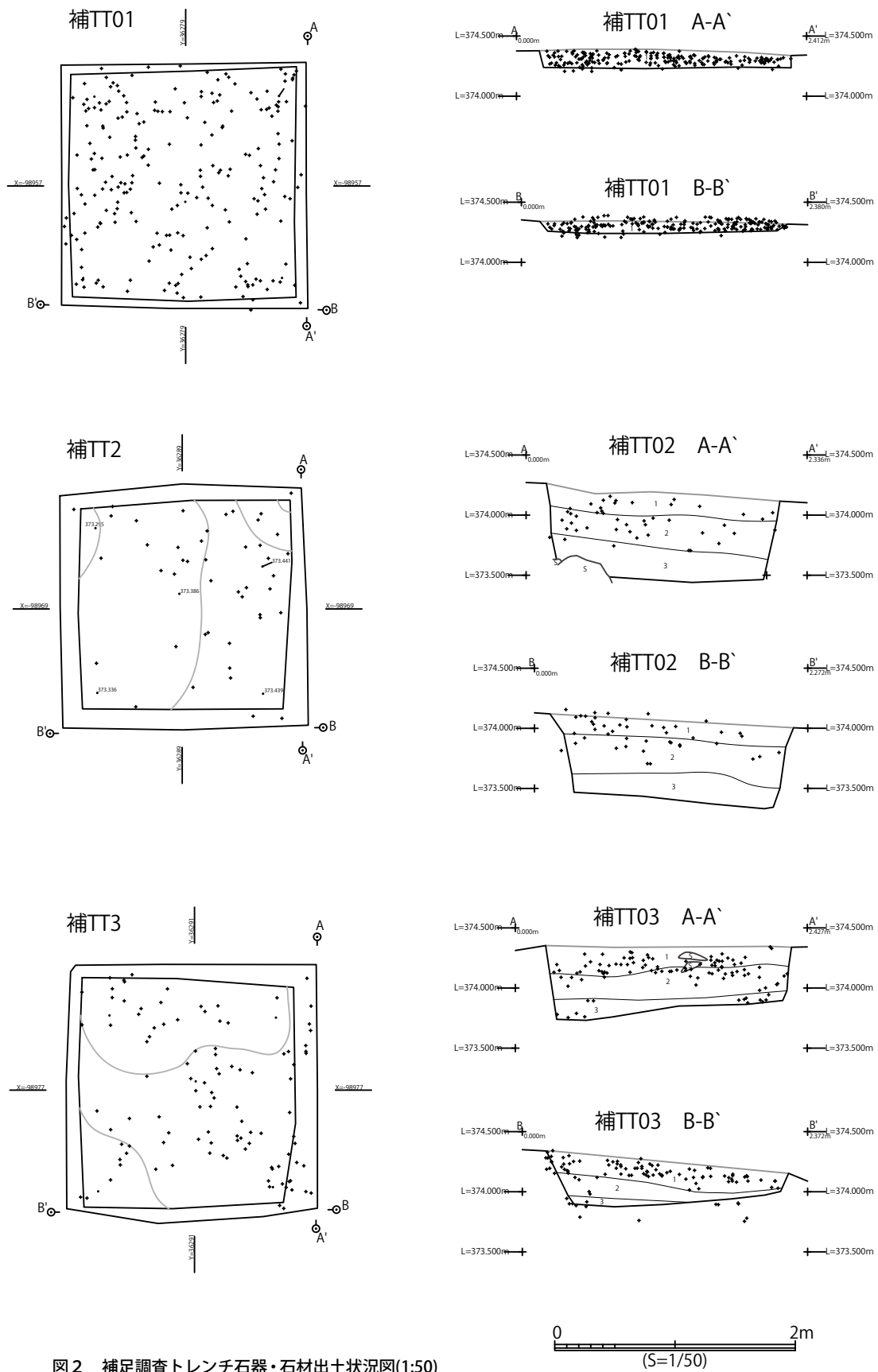


図2 補足調査トレンチ石器・石材出土状況図(1:50)